

# 現代中国語における“V + 上 + NP”構造 “上”の終結性をめぐって

黄 利恵子

## 0. はじめに 「方向性動詞」

現代中国語において、動詞（以下「V<sub>1</sub>」とする）に方向性概念を付与する場合、V<sub>1</sub>の後ろに方向性を示す動詞（以下「V<sub>2</sub>」とする）を後接するが、それは、日本語における「駆け戻る」「跳び上がる」等の複合動詞に相当すると言える。中国語において、このV<sub>2</sub>は一般に方向補語と称され、単純方向補語の“上・下・来・去・进・出・回・过・到・起・开”と、“来・去”が他の単純方向補語と結びついた複合方向補語に分類されている<sup>1</sup>。しかし、刘

荣(1954)は、“V+上”の“上”を、補語ではなく中心動詞と捉え、修飾語と被修飾語の関係（“ 蚰 蚰”）にあると述べ、また、（1994）は、単純方向補語の中の“来・去”及び“来・去”と結合した所謂複合方向補語のみを方向補語に分類している。吕は、そのように分類する理由として、（1983）《 》の分類を検証し、“V+来・去”が主に方向性を表すのに対し、それ以外の“V+上”類は主に結果性を表しており、方向性を有する“ 上（駆け上がる）も、同時に結果性を包含していると述べている。

本稿は、このような方向補語の定義については論及しないが、基本的に、「前項動詞V<sub>1</sub>に方向性概念を付与する」という、これらに共通する文法的意味を確認し、以下「方向性動詞」（V<sub>2</sub>）として扱う。

さらに中西（1989）は、第1節に挙げた方向性動詞以外に、“近”と“満”を挙げている。筆者は、“近”も「前項動詞に方向性を付与する」という方向性動詞の文法的意味を有していると考え。何故なら、“他走近了楼前”（彼はビルの前に近づいた。）のように、移動動詞V<sub>1</sub>に後接し、“走”という移動動作が、“楼前”の方向に向いていることを示しているからである。中西は、さらに“満”を挙げているが、“満”は全く方向性を有さず、本稿

は、“満”を方向性動詞に含めない。

### 1. “V + 上 + NP”の“上”

さて前節で挙げた方向性動詞の中で、とりわけ“上”と“下”は、空間名詞（方位詞）でもあり、顕著な方向性を有していると考えられる。他の方向性動詞の場合、主体の立脚点や客体の地点等の個別の基準点によって、その方向性が相対的に定まるのに対して、“上・下”は、重力を基準にした絶対的方向性を有しているのである。

即ち、“上”は、基本的に「低位置から高位置への移動」を、そして“下”は逆に「高位置から低位置への移動」を表す。日本語では、同様の方向性を「駆け上がる」「持ち上げる」「跳び下りる」のように、「V<sub>1</sub> + 上げる/上がる」或は「V<sub>1</sub> + 下りる/落ちる」等で表現する。しかし、結びつく動詞や、文中に共起する場所目的語（以下「NP」とする）と方向性動詞との関係等については、日本語と中国語において同一ではない。<sup>2</sup>

さて、相原（1997）は、“上”の方向補語としての意味（派生義を含む）を、以下のように整理している。

低位置から高位置への移動

接近

開いた状態から閉じた状態に向かう

ある物がある場所に存在させる。

到達しにくい目標に到達したことを表す。一定の数量に達する。

動作が開始してさらに継続すること。

この中で、**が**基本的にNPと共起するが、**と**及び**の**の意味を表す場合にも、1部NPとの共起が見られる。本稿は、この“V<sub>1</sub> + V<sub>2</sub> + NP”構造の中で、V<sub>2</sub>が“上”の場合に、“上”が表す意味と統語的機能を、NPに付加される方位詞との関係から、また類似の方向性動詞との比較によって、明らかにすることを目的とする。さらに、その中で“上”が終結性（telicity）を有するのか検証する。

### 2. 方向性動詞が指し示す場所 (NP) 「起点」「経過点」「着点」

方向性を伴う出来事、即ち、モノの移動は、「起点」「経過点」「着点」という地点が関与するが、方向性動詞の中で、“起・来・去”はNPと共起す

ることができない。この中の“起”については、基準となるべき「起点」「経過点」「着点」の何れからも無関係であることを示している。言いかえるならば、「下から上への移動」を表す“起”も、“上”と同様に、重力による絶対的方向性を有していると言える。また、“来”については、主体の立脚点の方向に、“去”については、主体の立脚点から離れる方向に、それぞれ方向性が定まっているため、“来・去”に地点概念も内包されていると考えることができる。

以下、“V<sub>1</sub> + V<sub>2</sub> + NP”構造において、方向性動詞と共起するNPが、どの地点を指し示しているのか整理する。

“出・开・下”は、基本的に「起点」を示し、その地点から離れることを表す。

- (1) 出。尾(彼は家を出た。)
- (2) 开。脐(彼は大学を離れた。)
- (3) 下。杼(彼は舞台から飛び降りた。)

しかし、“出”については、以下の表現例から「経過点」をも示すとする説もある。

- (4) 出。站(何教授は幾人かの勇ましい男達に建物の外に押し出された。)

しかし、この“出”は“楼”をメトニミー的に示しているだけであり、「起点」を表しているにすぎないと筆者は考える。したがって、“出”“楼”“出”などが、NPとなる。

- (5) \* 出。岫(彼は毛う窓から逃げ出した。)

表現例(5)のように、“出”戸のような特別な出入り口では非文となるのも、その所以である。

さらに“下”が「着点」を示すという節もある。

- (6) 下。服, 屐。去(彼は服を脱ぐことなどかまわず、バシャンと水に飛び込み、船に向かって泳いでいった。)

しかし、それは表現例(6)のように「着点」が“水”の場合に限られる。中国語で「水に入る」ことを“水”と表現するように、水面下に下りていく意味を含むために、“下水”が成立すると考えられる。したがって、厳密な意味で「着点」を表しているとは言えず、“水”の性質による例外と位置付けてよいと考えられる。したがって、“下”と共起する地点は「起点」であると言える。<sup>4</sup>

また、「着点」を示す方向性動詞には、“进・回・到”がある。

- (7) 水 一滴一滴この危篤の病人の口の中に流れ入っていった。  
 (水が一滴一滴とこの危篤の病人の口の中に流れ入っていった。)
- (8) 王 さんは台所に駆け戻り、包丁を持ってきた。  
 (王さんは台所に駆け戻り、包丁を持ってきた。)
- (9) 私 は、彼女のために旅行かばんを提げ、長安街にやって来た。  
 (私は、彼女のために旅行かばんを提げ、長安街にやって来た。)

この中の“到”は上下移動、水平移動を問わず表すことができるが、高位置への移動を表す際は、“上”と置き換え可能な場合が多い。この時、“上”と“到”で、どのような違いがあるか、また、“上”は「着点」を表し、結果性・終結性を有すると考えられてきたが、本当にそうなのか、4節で詳述する。

“近”は、0節で述べたとおり、ある地点への接近を表し、厳密な意味での「着点」ではないが、めざす方向への「接近点」を表していると言える。

- (10) 他 破 はビルに近づいた。  
 (彼はビルに近づいた。)

“过”は、移動の「経過点」を示す。

- (11) 他 旗 子 越えて手を伸ばし、私と握手した。  
 (彼は机を越えて手を伸ばし、私と握手した。)

### 3. 場所目的語(NP)の方位詞の必要性

名詞に対する方位詞付加の必要性の有無については、黄(2002)においても若干触れたが、その名詞が固有名詞であるか、普通名詞であるか、場所名詞であるかによって、さらに名詞の音節数等によっても異なる。基本的に、

普通名詞には方位詞付加の必要性があるが、その場合でも、“V<sub>1</sub> + V<sub>2</sub> + NP”構造という文 (sentence) で捉えると、その方向性動詞の性質によって、後に置かれる NP に対する方位詞付加の必要性が異なる。ここで言う方向性動詞の性質とは、地点と移動動詞 V<sub>1</sub> との関係性のことであり、前節で述べた「起点」「経過点」「着点」の何れと結びつくかによって異なる。

「起点」を表す方向性動詞“下・开・出”の場合は、以下の通りである。

(12) 楼。(彼はビルから飛び降りた。)

(13) 开 杼 (彼は舞台を離れた。)

(14) 闯 砦 (魚が水槽から跳び出した。)

(12) ~ (14) の表現例のように、「起点」を表す方向性動詞は、方位詞を必要としない。また、“下”の表す意味を、「高位置から低位置への移動」と規定するだけでは不十分である。

(12) 楼。(彼はビルから飛び降りた。)

(15)\* 。楼 \*彼はビルから駆け降りた。)

表現例(12)は、V<sub>1</sub>“跳”の動作により、施主が「起点」の“楼”から離れているが、表現例(15)は、“楼”という範囲内で、低位置に向かって“跑”という移動動作が行われ、施主はその地点内に存在するため、“楼”は「起点」とはならず、非文となる。つまり、“V<sub>1</sub> + V<sub>2</sub> + NP”構造において、“下”と共に起する地点は、まさしく「起点」のみである。

「経過点」を表す“过”も、以下の通り、方位詞を必要としない。

(16) 过 杼 (彼は舞台を通った。)

しかし、「着点」を表す“回・到・进・近”は、以下の表現例の通り、方位詞が必要である。

(17) 。(彼はベッドに駆け戻った。)

(18) 。(彼は部屋に着いた。)

(19) 喘 。(彼は魚を水槽に放し入れた。)

(20) (彼はビルの前に駆け寄った。)

それは補語“在”も同様である。

(21) 。 (彼は椅子に座る/座っている。)

表現例(21)は、“在”が存在場所を示し、「彼は椅子に座っている。」という状態を表す場合と、“在”が移動場所「着点」を示し、「彼は椅子に座った。」という瞬間動作を表す場合がある。この「着点」「存在点」を表す場合も方位詞は不可欠である。

「着点」を表す“進”は、さらに「経過点」を表すが、「経過点」を表す場合は、表現例(22)の通り、方位詞を必要としない。

(22) 。 (彼は窓から駆け込んだ。)

#### 4. “上”の特殊性

さて、第3節・第4節での分析をまとめると、以下の通りである。

“ ” は、NPと共起しない

“ ” は、NPが「起点」であり、モノがNPから離れる。

方位詞は不用である。

“过”と“ ” は、NPが「経過点」である。

方位詞は不用である。

“近”は、NPが「接近点」であり、モノとNPは未だ離れている。

方位詞は不用である。

“ ” は、NPが「着点」であり、モノとNPが密着する。

方位詞が必用である。

方向性動詞“上”のNPが「着点」であると考えれば、上の法則から、方位詞付加の必要性があると考えるのが自然である。しかし、次の表現例の通り、方位詞は必要ない。

(23) 。 (彼は椅子に跳び上がった。)

(24) 他爬上山了。 (彼は山に登った。)

2節で述べた“跳下水”のNP“水”が「着点」であるかという問題について、NPに方位詞を付加した文“\*他跳下水里”が非文となることから“水”が「着点」ではないことが伺える。

“近”も、前節で述べたとおり、V<sub>1</sub>の移動の方向性をNPに向けるという

意味役割を担っているが、「着点」でないために、方位詞の不可は必要ない。ここから、“上”に後接されるNPも「着点」ではないという仮説をたてることができる。この点について、次節で検証していく。

### 5. “V+上+NP”と“V+到+NP”

表現例(23)(24)の補語“上”を“到”に置き換えると、そのままでは非文となり、やはり、方位詞の付加が必要となる。

(23')\*                   。了 (23")                   。了  
(24')\*                   。了 (24")                   。了

この時、文の基本的意味は変わらない。

以下の例のように、“近”を“到”に置き換えた場合も同様で、そのままでは全て非文となり、方位詞を付加することによって文が成立する。

(25)                   。户 (彼は窓に駆け寄った。)  
(26)                   。壁 (彼は壁に駆け寄った。)  
(27)                   。 (~~彼は~~一本の大木に駆け寄った。)  
(25')\*                   。户 (25")                   。儿 @  
(26')\*                   。壁 (26")                   。前  
(27')\*                   。 (2第)                   。第鞞下

但し、以下の場合には“上”と“到”を置き換えることはできない。

(28)                   (彼は今坂道を駆け上っている。)  
(28')\*                   。

上例は、“在”を用いて動作の進行相を表す文であるが、補語“上”を用いた表現例(28)の場合は成立し、表現例(28')において、「着点」を表す“到”に置き換えた場合は非文となる。

(29)                   了。坡彼は坂道を駆け上った。)

表現例(29)において“上”が「着点」を表しているように見えるが、進行相を表す(28)が成立することから、“上”が「着点」を示していないことが明らかである。つまり、表現例(29)は、文末のアスペクト助詞“了”によ

って、「駆け上る」という動作の結果相が表されているのであって、“上”自体に終結性 (telicity) は包含されていない。それに対して“到”は、終結性 (telicity) を内在しており、進行相を表現することができないのである。このことは、さらに以下の表現例の可否にも表れている。

- (30) (彼は椅子から机の上に飛び乗った)  
 (30') ?

表現例(30)は、“从～V到～”という「起点」「着点」を明確に表す文である。したがって、“到”を“上”に置き換えた表現例(8')は、不自然な表現となる。

しかも、表現例(28)(29)で用いたNPは「坂道」であり、移動の経路である。中国語においては、“了。楼のように、NPが「経過点」であっても「着点」であっても、同様に補語“上”の後に置くことができ、統語的に差異はない。しかし、日本語においては、NPが移動経路の場合は、「坂を上る」のように助詞「を」を用い、NPが到着点の場合は、「二階に上る」のように助詞「に」を用いる。さらに、この「を」は、「バスを降りる」のように「起点」を表す場合もあるが、この移動動詞と共に空間辞として振舞う助詞「を」について、中右(1997)は、「地点」(「起点」或は「経路」)が問題なのではなくて、「動作が作用する対象」として取りたてる機能を有していると述べている。

中国語において普通名詞を場所化するには方位詞の付加が必要であるが、“V+上+NP”構造のNPには方位詞を付加する必要がない。これも場所としてではなく、「動作が作用する対象」として取り上げていると考えられまいだろうか。以下のようなコンテキストにおいて、“上”と“到”は異なりを見せる。

- (9) , 上  
 (私達は続けて上らなくてはいけない。もし山頂にたどり着かなければ、寝る場所はないのだから。)
- (10) 嗑 獾 蟛 嶠  
 (私は多くの山を上ってきたが、今回あの山に上ったら今後はもう上ることはない。)

表現例(9)は、「地点」としての「山上」を問題とする文であり、表現例

(10) は、当然「山上」に達する意味を内包しているものの、その「地点」が重要ではなく、対象化された山そのものに焦点がある。したがって、いずれの表現例も、“上”と“到”を置き換えると不自然な文となる。

山  
山

以上から、“上”は「低位置から高位置への移動」という方向性を前項動詞に付与しているが、NPを対象化しており、「地点」としての厳密な意味での「着点」を表すものではないと考えられる。

“下”の場合にも同様のことが言える。

楼

\* 楼

。

飛び降りる出発点が、ビルか2階かという差異であり、日本語においてはどちらも「から」によって、「起点」を表す。しかし中国語では、「ビル」の場合は「対象化」し、「2階」の場合は具体的「地点」として示される。

#### b)抱き上げる

抱上床 抱上楼 抱上膝盖 \*抱上里 \*抱上腿  
车 ? 车

ベッド或は階上をNPとした場合には、「抱く」という動作が最終状態ではなく、移動時の状態である。しかし「着点」が身体部位の場合、その判断は難しい。「ひざの上で抱く」ということが言えるのであれば、「抱く」という動作状態は移動時から「着点」到達後も継続しているということになる。但し、「胸に抱きあげた」「脚の上に抱きあげた」は非文となる。「胸」の場合は、方位詞“里”がついていることからわかるように、イメージ的内部空間を示しており、「定着」する明確な場所ではない。また「脚」も足首までの広範囲をあらわすため、明確な場所にはならない。「ひざ」という具体的場所が示されるときのみ、“上”がNPをとることが可能になる。

まとめ

用例出典

- (4) 逃 喰蚕 鏡 》
- (6) (駱聿 喰蚕 鏡 》
- (7) 容
- (8) 斌
- (9) 容
- (11) 牟

注

- 1 用語は、相原茂監訳 1997 『現代中国語文法総覧』くろしお出版 458 頁による。また“起”だけは“去”と結びつかない。
- 2 大橋志華(2001)「動補構造〔動詞+“上”〕に対応する日本語表現について」『日中言語対照研究論集』第3号 日中言語対照研究会 81-98 頁 を参照。
- 3 中西(1989)は、“ 縞 响点 愕 间” (出典: 黎1986) 《 胡 桐唢啾) を引用しているが、筆者によるインフォーマントチェックでは、全員が不可とした。“起”の後ろには、施事或は、“ ” 直等の身体動作の場合に限り、受事である“ 恻 ” 兼身体名詞が置かれる。
- 4 鈞 (1981) 《 》 传 縹 に霏嫫 ‘身 通, 里 屨 ” 筇 いう文が見られるが、筆者によるインフォーマントチェックでは、全員が不可であった。その他に、“ \* 地等「着点」を表せるかチェックしたが、やはり、何れも不可であった。  
跟(1998) 111 頁に、“上”を「低位置から高位置への移動」と「目標物への移動」に分けて、結びつく動詞が列挙されている。

引用文献

鞠 荣1954) 《 》 题》縹  
 跟 华 (1983) 《 》 縹 縹 麻得 昨 霏嫫  
 中西正樹 (1989) 「 鈞 縹 救 」 『中国語学』236-79-83 頁  
 民1993) 「 》 》 『中国語学』240-84-88 頁  
 华1994) 《 》 女得 縹 縹 縹 霏嫫58-162 頁  
 中右実編 (1997) 『日英比較選書 空間と移動の表現』研究社出版 29-35 頁  
 跟 华 (1998) 《 》 喰蚕 縹 释 縹 筇 霏嫫  
 黄利恵子(2002)「現代中国語“上”が示す空間再考」『言語文化論集』第2-3巻 第2号